ふるさとの誇り 6

能蔵池の赤牛

野牛島の北に能蔵池という池があります。昔は今よりずっと大きくて、まわりには大きな木が茂り、昼間でもうす暗い中に、池だけが青々と水をたたえていました。この池には昔から大きな赤牛が住むと伝えられていました。

ある晩のことです。野牛島村の娘さっちゃんは、一人で池のふちに立ち、誰に言うともなく明日の結婚式で使う食器がないことをつぶやきました。

能蔵池

さっちゃんの家はもちろん、どこの家でも欠けた茶碗に欠けた湯のみ、お客さんに出せるようなものはあまりありませんでした。

ところが式当日、池に行ってみると、おわん、どんぶり、さら、ちょこ、お膳までみんなそろっているではありませんか。みんな驚き、誰が用意したのかと不思議がりました。するとそこへ長老が来て、「この池には、昔から赤牛さまと呼ばれる神様がすむっちゅうど。その赤牛さまじゃねえだろうか」といいました。みんなありがたがり、村の人たちは、人寄りがあると能蔵池へ来て、おわんやお膳を貸してほしいと頼むようになりました。赤牛さまはそんな村人の願いをちゃんと聞いてくれました。

ところが、あるときこの願いが聞いてもらえないことがおこりました。それは誰かが、借りたおわんやお膳を返さなかったため、赤牛さまが怒って能蔵池から姿を消してしまったからです。それからは村には悪いことばかり起こり、いいことはありませんでした。

そこで、村人たちはお金を持ち寄り、能蔵池の真ん中の島へ祠をたてました。しかしそれでも赤牛さまは二度と帰ってきませんでした。赤牛さまは、甘利山のさわら池に移ってしまったのでした。そこでは、村人を苦しめている領主の息子を池に引きずり込み殺してしまいます。起こった領主はさわら池を埋めはじめ、それっきり赤牛さまは、この池に住まなくなり、もっと奥の、高い千頭星山にのぼって、大笹池に住んだということです。

韮崎でもこれと似た赤牛の伝説が伝えられています。さわら池の主であるみずち(蛇)が領主の子供を池に引きずり込みました。怒った領主は池を埋め立てます。みずちは赤牛に変化して大笹池に逃げます。さらに能蔵池へ逃げた後、赤牛は行方しれずになりました。

このように韮崎側の伝承では、赤牛が逃げるルートが野牛島側と逆になります。二つの物語を結ぶ三つの池はかつて雨乞いの祈りが捧げられた場所。赤牛は雨乞いのルートを移動しているのかもしれません。この二つの昔話には水を求め続けた人々の歴史が見え隠れしています。

大笹池